

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 15 日現在

機関番号：32404

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22320108

研究課題名（和文）外国語コミュニケーション能力育成のための日本型 CEFR の開発と妥当性の検証

研究課題名（英文）Development and Verification of Japan Standards for Foreign Language Proficiency-based on the CEFR

研究代表者

川成 美香（KAWANARI MIKA）

明海大学・外国語学部・准教授

研究者番号：60224804

研究成果の概要（和文）：外国語教育の分野で現在世界基準になりつつある CEFR（ヨーロッパ共通参照枠）に準拠して、外国語（特に英語）コミュニケーション能力に関する到達指標となるジャパン・スタンダード（Japan Standards for Foreign Language Proficiency-based on the CEFR. 通称「JS」）を開発した。CAN-DO リストによる学習到達目標と具体的な言語材料を明示し、JS を活用した教育現場での授業実践を通してその有効性を示した。

研究成果の概要（英文）：We developed “Japan Standards (JS) for Foreign Language Proficiency-based on the CEFR”. Our goal is to make JS an appropriate scale in tune with social and cultural contexts in Japan in order to be relevant and usable in the Japanese context of ELT. In order to accomplish this goal, with regard to language materials and designated levels, we have been trying to validate JS in some classrooms in cooperation with school teachers, so that it can be more readily accommodated to Japanese settings. We expect that JS provides sufficient validity, and contributes effectively to the improvement of English teaching in Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	3,000	900	3,900
2011 年度	1,500	450	1,950
2012 年度	1,500	450	1,950
年度			
年度			
総計	6,000	1,800	7,800

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：CEFR, Japan Standards, 外国語教育、到達指標、コミュニケーション能力、英語

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、グローバル時代における日本人の「英語コミュニケーション能力の到達指標のナショナル・スタンダード化」を目指して、「新たな基準」の策定および教育現場での運用方法を提案すべく、実証的調査および検証を行おうとするものであった。

2010 年当時において日本の学習指導要領は、英語コミュニケーション能力養成を目標としているものの、学校や教師、生徒のための具体的な到達指標は明確には示されていない。小学校での英語教育が開始された現状を踏まえると、子供から大人に至るまでの言語能力を測定できる一貫性ある到達指標の

設定が急務であるとの考えに至った。そのような到達指標が設定されれば、国・各自治体・各学校でのシラバス、カリキュラム教授方法、試験、教科書等の向上のための有効な基盤となるであろう。さらにそのような到達指標が国家政策としてナショナル・スタンダード化されれば、学習者と教授者に明示的な指針となり、ひいては日本人全体の英語力向上にも資すると見込まれる。本研究は、新たな到達指標の具体化とその内容の実証的検討を行うため、英語教育学のこの領域に継続的に携わる研究者が行う総合的研究である。

## 2. 研究の目的

世界では、さまざまな分野でのグローバル化が加速的に進んでいる。日本人のグローバル人材育成に関する 2011 年発表の産学官の諸事業の中で、日本人がグローバル人材となる不可欠な要件のひとつに「語学力とコミュニケーション能力」が謳われている。英語教育においても、文科省より 2011 年発表の「国際共通語としての英語力向上のための 5 つの提言と具体的施策」は周知のところである。

本研究「外国語コミュニケーション能力育成のための日本型 CEFR の開発と妥当性の検証」の目的は、世界の言語政策を視野に入れ、現在の日本の英語教育界の課題に対して、実証的手法で具体的な方策を提案・議論しようとするものである。その中心は、研究課題名にある「日本型 CEFR」の開発である。われわれはこれを、「外国語（特に英語）運用能力に関するジャパン・スタンダード」(Japan Standards for Foreign Language Proficiency-based on the CEFR: 以下 JS) と称し、新しいかたちの学習到達基準を策定すべく「JS プロジェクト」として研究を押し進めてきた。

これは平成 16 年度～19 年度基盤研究 (A) (研究代表者：小池生夫) のもとで行った研究成果の一部である CEFRjapan(小池, 2008) を発展的に研究したものである。そのポイントは、CEFR の特徴でありかつ潜在的な問題点ともいえる、(1) descriptors の表現が抽象的で具体性に欠ける点、また、(2) レベル分けが 6 段階という大雑把なもので現場での使い勝手が悪い点を克服しようとするものである。そのため、(1) JS では、語彙、文法、表現という言語材料を具体的に明示し、(2) A1 は 3 つに、A2, B1, B2 はそれぞれ 2 つに細分化する。つまり、CEFR の can-do statement (以下 CDS) を具体的に把握できるよう実体化し、弁別力があり現場に役立つような実用化をめざした。

本研究 JS プロジェクトの最大の特徴は 2 つある。1 つめは、JS は世界基準である CEFR に準拠していること。すなわち、CEFR

を日本へ直輸入するのではなく、世界基準との整合性を保ちつつ日本の社会文化的なコンテキストに適合するよう策定してある。この実現のために、われわれは English Profile (2012), A Core Inventory (2010), Cambridge Young Learners English Tests (2007), フィンランドの教科書や National Core Curriculum (2004) 等を参照した。さらにフィンランドや EU 全体の言語政策に深く関わっている Dr. Sauli Takala (ユバスキュラ大学名誉教授) を海外研究アドバイザーにお迎えして、さまざまな貴重な示唆をいただいた。今や教育立国であり英語能力も世界トップをいくフィンランドに、あくまでも JS プロジェクトはこだわった。JS「言語能力記述一覧表」のディスクリプターの基本的な提示方法は、CEFR 準拠の National Core Curriculum を参照しているが、これにはフィンランド教育省の了解を 2007 年当時に得ている。今回科研でのフィンランド・スウェーデン訪問の際には、フィンランド教育省の言語政策担当者や CEFR 研究専門家に、JS「言語能力記述一覧表」の原案をみていただきアドバイスを得た。また現地の小中高を訪れた際にも、授業視察だけでなく現場教師にも意見を聞く機会を得た。

JS の 2 つめの特徴は、JS プロジェクトを学校現場の教師とタイアップして進めたことである。JS 能力記述一覧表の作成段階から、日本女子大学附属高等学校英語科の 4 名の先生方に協力をお願いし、ディスクリプター検討会と称する研究会には膨大な時間を費やした。すでに日本女子大学で高大一貫の指標研究に携わっていた先生方の意見は、経験に基づく示唆に富むものであった。ディスクリプターの作成だけではない。さらに教室現場で JS をとり入れた授業実践をとおして、目標設定・教材作成・評価などに JS がどのように活用できるかが実証的に提示された。また、初級者レベルである Pre-A1 レベルについても、聖学院小学校に、授業実践をとおして Pre-A1(案)の検証をお願いした。その結果ディスクリプターの再編成と精密化がなされた。このような現場とのタイアップこそが、JS の貴重な検証プロセスとなった。

## 3. 研究の方法

本研究の中心課題は、世界基準である CEFR に準拠した、外国語（とくに英語）運用能力に関する新たな基準である「ジャパン・スタンダード」の策定、および教育現場での運用方法のアクションプランを提案しようとするものであった。JS プロジェクトは、フィンランドの CEFR を基盤とした National Core Curricula の LPS (Language Proficiency Scale) と、CambridgeESOL の YLE (Cambridge Young Learners English

Tests)の語彙と文法構造リストの提示方法をもとに、岡、笹島、川成の3人が過去の科  
 研研究で作成したCEFRjapan(小池,2008)  
 を発展的に研究した。

本研究では、JSの枠組みとなる言語能力記  
 述一覧(4技能、C2からPreA1まで全12レ  
 ベル)を日本の社会的、文化的コンテクスト  
 に適合させることをめざして、ディスクリプ  
 ターのCAN-DO形式の能力記述文を設定し、  
 言語材料(語彙、文法構造、表現)を明示し  
 て、その精緻化のためにさまざまな検討・検  
 証・応用実践を行ってきた。

具体的には、(1)日本の各学校段階の  
 CEFRなどにも詳しいベテラン教師(研究協  
 力者3名)との膨大な時間におよぶディス  
 クリプター検討会や、(2)日本語教育および  
 英語教育の分野のCEFR研究者3名から専門  
 知識を得るための研究会を実施。とりわけ、  
 (3)日本で開始したばかりの小学校英語教  
 育に相当するPre-A1レベルを細分化するた  
 めには、小学校英語教育にも詳しいCEFR専  
 門家に原案作成のアイデアを求めた。さらに、  
 JSの検証として、(4)JSプロジェクトの海  
 外研究アドバイザーであるDr. Sauli  
 Takala(フィンランド・ユバスキュラ大学名  
 誉教授、ECML顧問、EALTA前会長)を招聘  
 して、JSへの精査・コメントとJS研究の方  
 向性への示唆を仰ぎ、(5)フィンランド教  
 育省、フィンランド・ヘルシンキ大学、およ  
 びスウェーデン・ヨーテボリ大学のCEFR専  
 門家を訪問した際には、JSへの意見聴取およ  
 びそれらの国の高い英語力を養成する言語  
 教育システムの実態の把握に務めた。また、  
 (6)言語材料の提示には、CambridgeESOL  
 のEnglish Profileや、British Councilと  
 EAQUALSによるCore Inventory of  
 General Englishを基軸として、フィンラン  
 ドやイギリスのCEFRベースの教科書など  
 を参照しつつ、質的アプローチにより具体化  
 した。最後に、JSの応用実践として、(7)  
 日本の小学校英語教育に該当するレベルの  
 Pre-A1をさらに細分化して、私立小学校の  
 英語授業において検証した。また、(8)研  
 究協力者の私立大学附属高等学校の英語授  
 業において、JSを用いたカリキュラム作成、  
 到達目標設定、タスク作成、自己評価アンケ  
 ート、テスト・評価等を実施した。その結果、  
 JSが、小中高大一貫教育校の英語教育カリ  
 キュラムの一貫性を保ち、世界基準である  
 CEFRと各学校を結ぶ互換性をもつ有効な  
 指標になりうるとの結論を得た。

上記の研究成果は、国内外での学会発表  
 (第16回AILA国際応用言語学会、第50  
 回・51回JACET大学英語教育学会、第9回  
 EALTAヨーロッパ言語評価テスト学会、第  
 16回全国私立大学附属・併設中学校・高等学  
 校教育研究集会など)で報告した。そこで得

られたフィードバックは、24年度末の「最終  
 報告会」で公開したJS 2012(最終版)に向  
 けて有益な指針となった。

#### 4. 研究成果

##### (1) JS ディスクリプター策定

まず「JS」の全体像は、12レベル×4技能  
 について以下のような表の構成となっている  
 (図1)。

12 レベル	ディスクリプター	言語材料
C2	CEFR とほぼ同じだ が、4技能に分けてレ ベルを記述	
C1		
B2.2 B2.1 B1.2 B1.1 A2.2 A2.1 A1.3 A1.2 A1.1	CEFR の記述に準拠 して、フィンランド LPS を参考に、日本の 言語文化事情を考慮 して、4技能に分け て、レベルを記述	語彙例 文法構造例 テキスト例
Pre A 1	日本の言語文化事情 を考慮して、独自に設 定	別表

図1. JSでの外国語(とくに英語)レベル設定

次にディスクリプター策定は、主に以下の  
 4つの方針に基づいて行われた。

##### ①JS:ディスクリプターは4要素で構成する

策定の指針とした第1のポイントは、「JF  
 日本語教育スタンダード 2010・利用者ガイ  
 ドブック」(国際交流基金 2010)における  
 『Can-do の構造モデル』を参照した考え方  
 である。(図2)

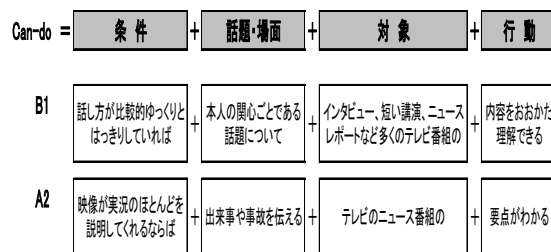


図2. 「Can-do」:ディスクリプターの構成要素

このモデルでは、CEFR(2001)のすべ  
 てのCDSは、「条件」+「場面・話題」+「対  
 象」+「行動」の4つの要素から構成されて  
 いるものとして詳細な分析を試みている。

(i)「条件」は、「このような条件が整っていれば」、(ii)「話題・場面」は、「このような話題に関して、このような場面・状況で」、(iii)「対象」は、「この程度のもの(テキストタイプ、素材)を」、(iv)「行動」は、「この程度～することができる」というように規定している。この方式を採用して、JSのすべてのディスクリプターの構成要素を細かく分解し、それを大々的に再構築する形で策定を試みた。

### ②JS:12 レベル/4 技能のディスクリプターの記述内容/順序の統一化

第2の策定のポイントは、各レベル・各技能ごとにみた、ディスクリプターの記述内容・順序の統一化である。JSは、各レベル・各技能の1つのグリッドが、4から5個以上のディスクリプターで構成されている。まず1番目には、そのレベル・その技能の特徴を象徴する「総論ディスクリプター」(General descriptors)を、2番目以降には、その特徴を具体的に示す能力として「各論ディスクリプター」(Specific descriptors)を記述する(図3)。さらにその内容は、語彙・文法などの制約の順に記述していく。この方式は、作成者がディスクリプター改訂作業をする中で機能的に見出したルールである。JSは、フィンランド版CEFRと同様に、1グリッドに複数のCDSが列記されているため、いかにわかりやすく複数のディスクリプターを並べるかが重要なカギとなる。(図3)

### ③JS:ディスクリプター4技能の難易度決定要素の明確化

第3の策定のポイントは、4技能の難易度を決定する要素を明確化し、これにより各技能の能力記述の精緻化を図ったことである(図4)。

### ④JS:想定する学年対応モデル

第4の策定のポイントは、各レベルの学年対応イメージを、CEFRjapan(2008)で学年対応させた「理想的推定モデル」(川成:2008)をもとにして、JSディスクリプターの難易度を調整する際の指針とした。JSは、CEFRと同様に学年や学習指導要領の枠を超えた基準でなければならぬが、現場での応用を想定すると、レベル設定と学年を対応させる試みが必要となるだけでなく、まずレベル設定の際にレベルの能力記述の幅を具体的にイメージする必要があった(図5)。

## (2) JS 言語材料参照表の作成

JSのディスクリプターをより具体化するために、語彙・文法構造・テキストの典型例を言語材料として提示することを試みた。

典型例を選定するにあたり、多くのCEFR関連の文献や教材などを参照し、検討を重ねた。その過程で、まずフィンランドの教科書で使われている言語材料にあらためて着目

1. 1 番目:「総論ディスクリプター」(General descriptor)
2. 2 番目以降:「各論ディスクリプター」(Specific descriptor)
3. 語彙・文法などの制約、の順に記述する

### <JS,B12,Listening:General descriptor>

■標準的なことばで発音もはっきりしていれば、自分の得意分野や興味あるテーマについて、日常生活や仕事の話題のほか、抽象的・文化的な話題についても、内容のポイントや概要を理解できる。

### <JS,B12,Listening:Specific descriptors>

● 英語学習者向けの一般的な話題に関連するニュースやインタビュー、短い講義や講演、電話のメッセージなどを聞いて、内容の大部分を理解できる。

● ゆっくりはっきり話されたテレビ番組であれば、身近な内容から既知の時事問題などでも、要点や内容のほとんどを理解できる

● 教科書などで使われる標準的な発音であれば、馴染みのない表現あっても、多少長くても、話された内容をほぼ正確に聞き取ることができる。

● 母語話者との具体的内容をともなう対話では、あまりよく知らない話題になると、聞き取りに問題がある。

図3. JS:「総論ディスクリプター」と「各論ディスクリプター」(川成 2010)

「聞く」①音声認識 ②語彙・文法力 ③スピード ④ 話題 ⑤話者の多様性(出身地, 年齢, 教育程度, 職業など)	「話す」①「対話」と「発表」②内容(専門性, 抽象度)・話題 ③場面 ④発音・イントネーション・アクセント(正確さ, 流暢さ) ⑤文法、語彙(正確さ, 適切さ)
「読む」①内容(専門性, 抽象度)・話題 ②テキストの種類 ③分量・スピード・読み方 ④表現	「書く」①内容(専門性, 抽象度)・話題 ②論理構造 ③スタイル(文体) ④文法, 語彙, 文章構成力

図4. JSディスクリプター4技能の難易度を決定する要素

学年	B2 レベルを目標としたモデル
大学4年	B2
大学3年	B2.2 - B2.1
大学2年	B2.1
大学1年	B2.1 - B1.2
高校3年	B1.2
高校2年	B1.1

高校1年	A2.2
中学3年	A2.1
中学2年	A1.3
中学1年	A1.2
小学校6年	A1.1
小学校5年	Pre-A1
小学校4年	Pre-A1
小学校3年	Pre-A1

図5. JSの想定する学年対応 (川成 2008)

することとした。フィンランドの教科書はテーマを設定しているが、言語材料についての基準は特に設けていない。しかし、小中高段階での LPS の到達目標は設定されているので、そのような点に配慮しながら、次の3種類の教科書を主に参考とした。

- ・ Open Road 1, 2, 3 (出版社 Otava) (高等学校レベル) → B1.1~B2.2 相当
- ・ Spotlight 7, 8, 9 (出版社 WSOY) (中学校レベル) → A2.1~A2.2 相当
- ・ Wow! 3, 4, 5, 6 (出版社 WSOY) (小学校レベル) → A1.1~A1.3 相当

語彙レベルに関しては、辞書などにも CEFR の6レベルが採用されるようになり、研究も進んだ。そこで、上記で選定した語彙レベルに関して、English Vocabulary Profile を主に参照した。これは、コーパスを基盤として語彙をコロケーションとして提示し、CEFR レベルを語彙の個々の意味別に示している。例えば、have であれば、A1 から C2 まですべてのレベルを含む。一つの語彙でも意味や文脈によりレベルが異なり、相当に複雑であることが予想される。社会文化的にも異なる可能性が指摘されるが、現時点で信頼性の高いレベル設定であり、利用価値が高い。

文法項目に関しては、語彙よりもさらにレベル設定が困難であることが予想された。ある程度の文法項目はすでに T-series 本 (Waystage, Threshold, Vantage) などで提示されていたが、ノーショナル・ファンクショナル・シラバス (notional-functional syllabus) (Wilkins, 1976) の考えに基づいて、文法という面からの分類とは観点が異なり、日本の英語教育事情では利用しにくい面がある。RLD を作成する際のガイドを示している Guide for the production of RLD (CoE, 2005: 14) は、「文法」について、文法項目を網羅的に示すことよりも、その文法項目が表す能力レベルを具体的な文脈の中で示すことが必要であると示唆している。その点から、English Profile や A Core Inventory for General English (North, Ortega, & Sheehan, 2010) でも、その点を踏まえて文法項目を大まかに提示し例文を示しているので、JS でも同様の視点で言語材料の選定の一つの根拠とした。

とりわけ A Core Inventory for General

English (North, Ortega, & Sheehan, 2010) も同様の観点から、Scenario という異なるアプローチで各レベルを理解できるように提示している。詳細は省略するが、基本的に各場面や状況に応じて、CEFR レベルを理解し、教えることや学ぶことに利用するという趣旨である。公開されている内容はコンセプトであり、詳細は不明であるが、多に参考にできる内容である。たとえば、Scenario の表の項目立てとして、表1で、domain, context, tasks, activities, texts を提示し、表2で、level (can-dos), criteria (interaction, coherence, range) を、表3で、competences (strategic, pragmatic, linguistic) を、さらに表4として、exponent, competence, activity, assessment を提示している。これをもとに、教師が授業内容を考え、生徒が学習するという設定である。CEFR の柱である教えることや学ぶことを明確に意識したコンセプトとなっている。JS も同様の目的を持ってプロジェクトを始めているので、言語材料選定において参考にした。

このように、語彙と文法項目については、フィンランドの上記の教科書から抽出した項目を、English Profile、A Core Inventory for General English に照らして確認し、判断できない場合は、さらに別の文献や教材などに当たり排除したり、最終的には、作成者側の経験に基づいて選定した。

表では、総論ディスクリプターが各レベルの技能全体を表す記述としてまず示されている。その英訳を参考として示した。これによりレベルの概要を理解することができるだろう。さらに、各論ディスクリプターが示されている。各ディスクリプターに合わせて、語彙、語彙の例文、文法項目、文法項目の例文(2例)とテキスト例、評価基準参考を提示してある。各論ディスクリプターをもとにこれらの言語材料を示したが、言語材料は必ずしも各論ディスクリプターのそれぞれに限定されるものではなく、あくまでも典型例として示したものであり、それをもとに各レベルの全体理解の一助とするという趣旨である。評価基準参考は、授業活動や学習者がレベルを判断する際の一つの参考である。これをもとに、各レベルを理解し、語彙や文法などのレベルを文脈で理解し、教材を選定し、活動を選定し、学習に生かせると考える。

\*ディスクリプターと言語材料参照表は下記ブログサイトよりダウンロードが可能  
<http://kawanarikaken.blogspot.jp>

### (3) JS 教育現場での検証と応用

上記のプロセスを経て「JS 言語能力記述一覧表」は策定された。さらに、次のステップとして、JS プロジェクトでは、小中高大の一



貫教育校の高等学校および小学校での英語教育において、検証および活用を試みた。かつて CEFR が、理論研究と現場実践との繰り返しを経た後に完成したことを鑑みても、教育現場での実践プロセスなくして、学習スタンダードや到達指標が実証的根拠にもとづいて策定されたものとはいえないからである。(その実践の詳細は上記ブログを参照)。

その結果、以下のことが見出された。(1) 効果的な英語教育を考える際には、目的論・教材論・授業論・評価論の4つの軸に有機的な一貫性をもたせることが必要で、まず JS は各学校における共通の尺度となり得る。各教員間に、めざすべき共通のゴールが設定されれば、共通の教材開発、授業展開、テスト開発が可能となる。(2) レベル構造が細分化した JS は、学習指導要領に基づく日本の英語教育カリキュラムとの整合性を保ちながら、学園独自の小・中・高・大までの一貫した英語カリキュラム開発の基軸となり得る。(3) CEFR に準拠した JS に基づいて学園の英語運用能力が指標化されれば、JS が世界基準である CEFR と一貫した英語力を保障することになる。つまり JS は、世界、日本、各学校に互換性を持たせるツールとなり得るとの結論に至った。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 13 件)

- ① 岡秀夫、フィンランドの Matriculation 試験—大学入試センター試験との比較、目白大学高等英語教育研究、査読有、第 19 号、2013、pp.23-32
- ② 川成美香、CEFR 準拠の新たな到達基準「ジャパン・スタンダード」の開発、明海大学大学院応用言語学研究紀要応用言語学研究、No.14、2012、明海大学、査読無、pp.151-169
- ③ Sasajima Shigeru, Is teaching English difficult or challenging for you? IATEFL 2011, Brighton Conference Selections. IATEFL 査読有。2012, pp.50-53. [学会発表] (計 10 件)
- ① 川成美香、岡秀夫、笹島茂 (2013 年 3 月 20 日) 科学研究最終報告会:「ジャパン・スタンダードの開発—CEFR の日本への応用—グローバルな英語コミュニケーション能力を求めて—」於: 目白大学
- ② 川成美香、吉田章人、相沢美希 (2012 年 8 月 31 日) 大学英語教育学会 JACET 第 51 回全国大会 於: 愛知県立大学、シンポジウム:「「ジャパン・スタンダード」の開発—CEFR の日本への適用 Part.2」

- ③ Sasajima Shigeru, Oka Hideo, Kawanari Mika (June 2, 2012) The 9th Annual EALTA Conference, University of Innsbruck, Austria, May 31-June 3, 2012. (Poster) 'Adapting the CEFR to the Japanese context: how can it be done?'

- ④ Kawanari Mika (August 25, 2011)

The 16th World Congress of Applied Linguistics (AILA: 国際応用言語学会), Beijing Foreign Studies University, Beijing, China, 23-28 August 2011, 'How to improve communicative English ability of the Japanese—a proposal for the prototype model of Japanese version of CEFR'

[図書] (計 7 件)

- ① 川成美香 (編)、明海大学、基盤研究 (B) 研究成果報告書 平成 22 年度～平成 24 年度科学研究費補助金、外国語コミュニケーション能力育成のための日本型 CEFR の開発と妥当性の検証、2013、357
- ② 岡秀夫、金森強 (編著)、成美堂、小学校外国語活動の進め方—「ことばの教育」として、2012、302
- ③ 川成美香、大修館書店、第 4 章 4 節「社会的文化的アプローチによる第二言語習得」『JACET 英語教育大系』第 5 巻『第二言語習得—SLA 研究と外国語教育—』佐野富士子、岡秀夫、遊佐典昭、金子朝子 (編著)、査読有、2011、pp.122-132

[その他]

ホームページ等

<http://kawanarikaken.blogspot.jp>

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

川成 美香 (KAWANARI MIKA)  
明海大学・外国語学部・准教授  
研究者番号: 60224804

##### (2) 研究分担者

岡 秀夫 (OKA HIDEO)  
目白大学・外国語学部・教授  
研究者番号: 90091389  
笹島 茂 (SASAJIMA SHIGERU)  
埼玉医科大学・医学部・准教授  
研究者番号: 80301464

##### (3) 研究協力者

吉田 章人 (YOSHIDA AKITO)  
由井 一成 (YUI KAZUNARI)  
相澤 美希 (AIZAWA MIKI)  
中谷 恵子 (NAKAYA KEIKO)  
日本女子大学附属高等学校・教諭